

「重要文化財 旧正伝院書院」

正伝院書院

正伝院書院は、如庵と同じく 1618 年に建仁寺の有楽邸の一部として建てられたもので、正伝院と呼ばれていたものの一部に過ぎない。正伝院は建仁寺の塔頭寺院で、有楽の私室や庭園、茶室などのほか、仏殿を備えていた。書院は、有楽が客人をもてなしたり、読書をしたり、くつろいだりできる場所であった。

1908 年、正伝院のさまざまな部分が、さまざまな業者に売られた。書院は如庵も買収した三井高棟に売却された。有楽苑の創設に伴い、両建物は犬山に移築され、有楽当時の姿に復元された。建物の位置関係も、有楽邸の当初の間取りを忠実に再現している。

復元工事

1971 年の再建では、建築家の堀口捨己は 1799 年に描かれた有楽邸の絵図を参考に、書院の外観を復元した。書院と茶室の間に三井家が増築した屋根付き通路を撤去し、書院の南縁側にあった低い手摺を復元した。さらに堀口は、南側に異様に長い長方形の石段を注文した。屋根は、名鉄が書院を取得した当時、棧瓦葺であったが、古い図面には木製の平板が描かれていた。堀口は、形は似ているが耐久性のある銅板葺きを選んだ。

建築の特徴

正伝院書院の正面玄関は北側にあり、伝統的に上品で格式のある意味を持つ緩やかな曲線を描いた庇（唐破風）の下にある。書院は、瓦の土間のほか、6 つの部屋と建物の西側に水屋と呼ばれる台所のような空間がある。有楽の時代には、この部屋は水屋ではなく、書院と正伝院の仏殿をつなぐ廊下の一部であったと思われる。

玄関から内壁を見ると、白のラインが印象的である。これらの色の薄い箇所は、建物の梁や柱の位置を示している。泥漆喰に含まれるマンガンが、時間の経過とともに壁の表面に溶け出す。これが酸化して、最表層が茶色く黒く変色するのである。ただし、壁の内側に木枠がある場合は、この影響は少なくなる。

襖絵

書院の部屋は、襖と呼ばれる大きなスライドする化粧板で仕切られている。屏風と同じように襖も複数の板に渡って風景画が描かれることが多い。書院の襖は、有楽の時代の最も優れた画家たちによって装飾された。中央の部屋には、かつて長谷川派の創始者である長谷川等伯（1539-1610）の襖絵が描かれていた。8 枚のパネルに、中国古典絵画に共通する 4 つの花、蓮、蘭、菊、梅が描かれている。樹木、岩、人物など、いずれも長谷川独特の画風で、襖絵は彼の中年期に描かれたものと思われる。（正伝院が創建される前なので、有楽のかつての住居から持ち込まれたものであろう。）

書院の他の襖は、日本画史上最も有名な狩野派の画家たちによって描かれた水墨山水である。これら

の襖絵は非常に古く脆いため、現在ではそのほとんどが書院から取り出され、保存されている。長谷川が描いた2枚の菊の襖絵は、有楽苑に保管されておらず、個人の所有物の様である。